氏名	會田　涼子
ヨミガナ	ｶｲﾀ ﾘｮｳｺ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第431号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉　１９世紀フィレンツェにおける建築家ジュゼッペ・ポッジの都市改造に関する研究

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	野口　昌夫
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	元倉　眞琴
（副査）	法政大学	教授	（デザイン工学部）	陣内　秀信
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	光井　渉

（論文内容の要旨）

本研究はイタリア王国の首都時代（1865-1871）におけるフィレンツェの都市改造を指揮した建築家ジュゼッペ・ポッジによって策定されたマスタープラン「プロジェット・ディ・マッシマ」を、計画上の実務的側面に着目して、ポッジの実態と理念を明らかにすることを目的としている。論文の構成は、序章、本章（第１章から第５章）、終章から成る。

第1章では、フィレンツェの近代都市改造を分析するため、建築家ポッジが作成した報告書『フィレンツェ拡大事業』の精査を行い、マスタープランの全容を明らかにし、ポッジの意図がもっとも反映された計画と考えられる、ミケランジェロ広場、コッリ大通りと周辺住居地区、市門周辺の整備事業を抽出している。

第2章から第5章では、これらの計画を分析対象として、実施図面や地形図などを用いて、各計画を実務的な観点から分析している。

第2章では、ミケランジェロ広場に関して、その建設目的と要求された機能と形態を、実務的側面から分析している。ここでは、イタリア国家統一の流れの中ではじめて利用可能となった土地の形状が、広場の形態を規定し、加えて歴史的に地盤改良が必要とされてきた背景から、土留めと排水機能を持たせたるための規模と形態が採られていることを明らかにした。そこでは近代的土木事業にルネサンスの建築言語を用いるという美観的調整を加えた、新しい機能を担う建築的工夫がなされていた。

第3章では、コッリ大通り建設に関して第2章と同様の分析を行っている。コッリ大通りの傾斜は緩勾配となるよう計算されたものであり、近代都市に求められていた交通インフラとしての要求に応えるものであった。その路程は洪水対策が考慮され、かつ飲料水や散水の問題が近代的技術によって解決されたからこそ実現可能なものであった。また、イタリア国家統一の動きの中で利用可能となった王室所有地を収用し、既存建築を回避した路程としたことで、財源が厳しい中でも広範囲にわたる大規模な道路が実現可能となっていた。

第4章では、第2、3章の丘陵地区の計画に対して、都市部の計画であるクローチェ門広場とカヴール広場を取り上げている。ここでは、描かれた大規模なパース図から、残す既存建築を取捨選択し、建設期の異なる2つのモニュメントが対峙する構図としたことで、都市の近代化を強調させようとする意図が読み取れた。また、広場の形態決定は、交通の利便性を解決し、かつ従来の機能をもった広場と、植樹された公園としての都市の近代的要素が融合された形状となっていた。市壁解体によって防衛機能と徴税の境界域が周辺の補強された河川へ代替されたが、地盤の操作によって、広場にも洪水対策としての機能を付帯させていた。

第5章では、コッリ大通り周辺住居地区に関して、ポッジ作成の規定書が建築物の配置と形態へ与えた影響を分析している。この規定書の精査により、共通の建築条件が提示されており、コムーネに建築計画を左右

できる拘束力があったことが明らかになった。大通り沿いに建設された建築物の配置は、道路と敷地の接し方に影響を受け、その結果、大通りからは、樹木の間をヴィラが見え隠れするような風景がつくり出されていた。また、そのような風景をつくる建築配置は、副次的な新設道路の設定が地形的条件に配慮された結果であった。さらに、既存建築においても大通りを意識したファサードが設置されるなど、大通りに面することに優位性がもたれていた。

最後に終章では、第1章から第5章までの各論で得られた分析結果の統合を試み、建築家ジュゼッペ・ポッジの理念と手法について考察している。

以上のように、本研究では、19世紀フィレンツェの都市改造を実務的側面に着目し、建築家ジュゼッペ・ポッジの首都フィレンツェのためのマスタープランを事例として論考をおこなった。

ポッジがマスタープランのなかで実現しようとしていたのは、一貫して、首都としてふさわしい都市をつくるということであった。その理想像とは、フィレンツェの厚い歴史的背景にもとづく過去の遺構や、豊かな地形が浮き立つものであった。しかしながら、そこで選ばれたのは既存の構造を単になぞるのではなく、新たに手を加えることにより新しい見方を提示するという手法であった。

このようなポッジ独自の設計手法は、近代に急速に発展しつつあった土木技術に裏付けられたものであり、イタリア国家統一という激動の時代にこそ必要とされたものであった。丘陵地の計画は国家統一後に可能となった大部分の土地建物の収用によって実現し、国家の事業であればこそ可能なものであった。また、都市改造の具体的手法の決定は土木的処置と意匠的操作を両立する手法がとられていた。

ポッジによるフィレンツェの近代都市改造は、近代都市のアイコンのみでは語れない、フィレンツェの都市の固有性にもとづいた計画がなされたのだといえるだろう。

（総合審査結果の要旨）

本論文は、イタリア王国の首都時代のフィレンツェ（1865－1871）の首都に向けた都市改造を実施した建築家ジュゼッペ・ポッジにより策定された「プロジェット・ディ・マッシマ」（都市改造計画書）が集約された『フィレンツェ拡大事業』（Sui lavori per l’ingrandimento di Firenze, 1882）を一次史料とした実証的な研究方法による論文である。加えて、2回にわたるフィレンツェ大学留学を通して、ジャンカルロ・パーバ教授、ガブリエーレ・コルサーニ教授から直接指導を受け、史料の蒐集、実地調査を計約2年間にわたり実施した誠実な研鑽と積み重ねの上に結実した労作である。

本論文の独創的な点は、以下の通りである。

１.『フィレンツェ拡大事業』を全訳した上で、特に技術的・実務的側面に着目してポッジの理念と実践を精査している点。

２．同時代に描かれたカルトグラフィア（図面資料）を悉皆的に蒐集し、カタスト（19世紀前半の課税用不動産登記台帳・付属図面）とともに丹念に分析している点。

３．建築史、都市史、地域史、土木、水利、災害、衛生にわたる多角的側面から、近代に直面した歴史都市を総合的に論じていく研究方法を提示している点。

４．近代の都市計画の背後にある、政治、社会、経済、文化の状況を示す資料・文献も渉猟し、その実態を正確に把握している点。

５．中世、ルネッサンス期に完成した都市構造がそのまま存続し、19世紀になって初めて近代化するフィレンツェを対象とすることの意義を見いだした点。

６．フィレンツェ以前の首都トリノと以降の首都ローマとの関連を論じると共に、近代の都市計画が実施されたパリなど他のヨーロッパの歴史都市からの影響に着目した点。

以上のように、本研究は１と２に示したような正当かつ実証的な研究方法を基底に、３と４に示したような領域を横断して研究する姿勢に貫かれているとともに、５と６のような時間軸と空間の拡がりの中で論を展開している。

論文は序章、５つの章、終章からなる。第１章では、プロジェット・ディ・マッシマ（都市計画改造書）が集約された報告書『フィレンツェ拡大事業』の全訳から、計画の全容を把握し、その中からポッジの意志が最も反映された計画を抽出している。第２章、第３章、第４章では、第１章で抽出された計画・実施の具体例として、ミケランジェロ広場、コッリ大通り、市門周辺地区の順に分析している。ミケランジェロ広場については、市壁を取り壊してできた環状道路の一部であること、眺望の獲得、象徴性、土地収用、地盤と排水、衛生面など多角的な視点から分析が行われ、広場の機能と形態決定要因を明らかにしている。コッリ大通りについては、景観の確保、土地収用、インフラとしての役割、アルノ川の洪水対策、飲料水問題の視点から、大通りの機能と路程決定要因を明確化している。市門周辺地区としては、カヴール広場とクローチェ門広場を分析対象とし、14世紀以来存続してきた市門に対するポッジの姿勢と対処、街区形状の決定、既存建築の扱い、洪水対策などの視点からその様態を明らかにしている。

以上の3つの章は、ポッジが設計図を作成して実施した具体事例であるが、第5章はポッジが文書によって計画の方向を定めた事例である。ここでは、ポッジが作成した規定書『コッリ大通り　地役権と同大通りの保全に関する配置計画』(Viale dei Colli Servitu attive e passive e Disposizioni Necessarie alla Conservazione di quel Passeggio, s.n.t.,1876) を精査し、住居地区の建物配置、大通りからの住宅ファサード、既存建物の改築について論じ、丘陵地区の変容と形成の実態を明らかにしている。

終章では、19世紀の建築家ジュゼッペ・ポッジが、最終市壁が中世後期1333年に建設されてから約500年にわたり変化しなかった歴史都市フィレンツェに対し、首都に向けた近代化をどのような理念をもって計画・実施したかが総括されている。

以上、本論文は、冒頭に述べたことに加えて、その方法の独創性と結果の実証性において国際的にも高く評価されるレヴェルに到達していることを確信し、本論文の審査委員全員が東京藝術大学博士課程の学位授与に値することを認めるものである。